

# 懐かしくも美しい 日本の俳句

Heartful Haiku Poems

Vol.61

山路やまぢ来て何なにやらゆかしすみれ草ぐさ

芭蕉ばせを



イラスト ひらいみも

山中の道を越えて来て、ふと路傍に咲いている葶の花が目にとまる。その濃紫の小さな花を見てみると、わけもなく心ひかれることだ、という意。初めは今の名古屋市熱田区にある白鳥山法持寺で、「何とはなしになにやら床し葶草」と破調で詠まれた句であったが、推敲されて掲出句のかたちに落ち着き、「大津に出づる道、山路をこえて」という前書をつけて、『野ざらし紀行』の伏見（京都）から大津（滋賀）へ向かう山路の句に変更された。どこで詠まれたかより、紀行文の完成度を重んじた結果であろう。

岡の長興寺・大分市生石の興玉社（火王社）の三ヶ所に、この「山路来て」の句碑を確認できる。とりわけ、玖珠町の碑は桜井梅室の筆蹟で、建碑は嘉永五（二八五二）年と古い。梅室は加賀国（石川県）金沢の人で、加賀藩の刀研師であったが、若年から俳諧に励んで、活動の拠点を京都や江戸に置いて活躍。門人は五十余国に及び、幕末期の大家と称された。句碑の建立者である古洞・霞城の両名はおそらく梅室の弟子で、地元の有効俳人だろう。残る二基の句碑は明治時代のものだが、建碑の事情は嘉永年間のそれと変わらず、松尾芭蕉顕彰という事業をよりどころに経営する、俳壇の様子をうかがうことができる。

東洋大学教授 谷地快一

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



So Sakamoto

1990年大分県生まれ。高校で焼物の技術を学び、卒業後に鳥取の岩井窯、山本教行氏の下で2年間修業を積む。2010年の春に里に戻り、父である八代目の工さんに弟子入りし、小鹿田焼の陶工となる。



小鹿田焼 (おんたやき)

日田の領地内の生活雑器を陶うために興された小鹿田焼。日用品に宿る美しさ、すなわち「用の美」を提唱した思想家の柳宗悦らによって紹介され、昭和に入って広く知られるようになる。1995年には伝統的・地域的特色を持つ製法が国の重要無形文化財に指定された。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE



パソコンやタブレット、CS放送など多彩にお楽しみください。

Web版

40人以上のバックナンバーがご覧になります。

<http://www.athome.co.jp/tobira/>



TV番組

ディスカバリーチャンネル (CS)

冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中

毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!



最新号のご案内 好評公開中

No.041 / 烏帽子職人 四日市 健 氏

## 小鹿田焼陶工

坂本創氏

ふるさとの恵みに感謝し、他にはない物をつくりたい。

小鹿田焼の印象は？

坂本「地味で『かつこ悪い』と思っていました。でも鳥取の窯元で修業をさせてもらった時、『小鹿田って捨てたもんじゃない』と思いました。外に出て初めてその良さが分かったんです。だから、修業を終えた後、改めて父に弟子入りしました」

これからの目標は？

坂本「焼きを甘くして、火の力をやわらげれば割れないかもしれません、

幼いころから土に触れ育った創さん。将来跡を継ぐのは当然と考えていた一方で、こんな思いも抱いていたという。

徳川幕府の直轄地、天領として栄えた大分県日田市の山里に、窯が点在する集落がある。小鹿田焼のふるさと、源栄町皿山地区だ。江戸中期に生まれた小鹿田焼は、300年以上の歴史を誇り、今もこの集落に住む14軒の内10軒がこの伝統を守る窯元。いずれも小鹿田焼の誕生に尽力した旧家の子孫に当たる。その一人坂本創さんは、皿山の未来を担う若き陶工だ。

小鹿田焼は昔ながらの味わいで色も模様も素朴。器自体は華やかな装飾用ものではなく、あくまでも日用雑器として盛られた料理を、また使う人を引き立てるために存在する。

横でろくろを操る父・工さんは師匠であり、ライブルでもあると話す創さん。それは父に負けない物をつくりたいという、思いの表れなのだろう。外から弟子を取らず、固有の伝統を守り続ける小鹿田焼の未来をつなぐためには、それくらいの気概が必要なのかもしれない。

土地に根つき、永い時を経た文化を伝承する者として、明日への扉を開け、また一歩、夢に近づけ。

※2011年1月取材掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!

自然と共に、焼物づくりに動じむ彼の姿を、動画で詳しくご紹介していきます。ぜひご覧ください。